

—平等となる聖地 遊びの楽園—

札幌市クロスフィット SSC における人類学調査報告

陳益輝

キーワード：クロスフィット、スポーツ、ジェンダー意識、遊び、コミュニティ

要旨

学部生時代の筆者は、最初ジムトレーニングに興味を持ち始めたが、徐々に伝統的なジム環境でのトレーニングでは、トレーニングの原動力である「モチベーション」を引き出すことが難しいことを実感した。段階的にトレーニングが途切れたり再開されたりする中で、スポーツにかける情熱も次第に衰えてきた。

そのような中、2021年8月に、筆者は偶然クロスフィットという新しいトレーニングスタイルに触れることになった。そして札幌市のクロスフィット SSC に参加し、これまで経験したことのない環境で地元のメンバーたちと共に日々のワークアウトに励んだ。新しいメンバーたちとの出会いや交流を通じて、再びワークアウトへのモチベーションが湧き上がり、不思議なことに、メンバーたちに対して家族のような帰属感を感じた。この経験を理解するために、筆者はフィールドワークを始めた。

本研究は、2021年8月から2023年12月までのフィールドワークや現場インタビューの資料をもとに、クロスフィットの特異な魅力や存在意義を追求するものである。

本論文は、六つの部分から構成されている。各部分は独自の役割を果たし、クロスフィットとジェンダー平等観に焦点を当てつつ、遊びの視点から人類学的なアプローチを提供する。

第一章では、クロスフィットを人類学的な研究の対象として選んだ動機や目的に加えて、先行研究の重要な概念や議論点に焦点を当てている。遊びの概念がなぜ重要か、特にクロスフィットとジェンダー平等観においてどのように関連しているのかが掘り下げられる。先行研究の中で浮かび上がる課題や未解決の疑問が、本研究の動機を明らかにし、研究の方向性を示す。

第二章では、クロスフィットの起源や歴史、トレーニングの形態などが具体的に紹介され、読者がクロスフィットについての基本的な理解を得ることができるように工夫されている。画像やイメージを交えながら、クロスフィットトレーニングの日常的なメニューがどのように構成されているかが視覚的に伝えられる。

第三章では、遊び理論に焦点を当て、フランス哲学者から日本人類学者への連携や変遷を追求する。この章では、クロスフィット SSC 会員メンバーの事例やインタビューを通じて、「眩暈」に関する質疑応答が行われ、遊びとジェンダーの複雑な絡み合いがより深く探究される。これにより、単なる身体活動だけでなく、個々の経験や意識の中にジェンダーがどのように影響を与えているかが明らかにされている。

第四章では、クロスフィット SSC の女性たちの視点に焦点を当て、ジェンダー平等性に挑戦し、ジェンダーの複雑な側面について討論する。これにより、単なる身体的な活動だけでなく、クロスフィットコミュニティ内でのジェンダーに関する自覚や挑戦がどのように展開されているかが浮かび上がる。ジェンダーを超越する意識と遊びの枠組みが、クロスフィットコミュニティ全体のジェンダーの生成に寄与していることが示唆されている。

第五章では、クロスフィット SSC の専門記事を紹介しながら、他の視点から論文のテーマを補足する。特にメモリアル WOD を通じて、クロスフィット SSC が持つ独自の歴史やコミュニティの形成がどのように進化してきたかが検討される。これにより、クロスフィット SSC が単なるトレーニングの場だけでなく、共有された歴史や経験によって結ばれた特別なコミュニティとして成長してきたことが浮かび上がる。

第六章では、これまでの研究から導き出された結論や未解決の部分が総括され、今後の研究の可能性についての考察が行われる。特に、遊びとジェンダーの関係が未だに十分に解明されていない点や、クロスフィット SSC の独自性がさらに掘り下げられるべきであるといった示唆がなされている。